プーシキン『スペードの女王』の比較文学的考察
――スタンダール『赤と黒』・バルザック『あら皮』『赤い宿屋』との対比――

森　田　敦　子

はじめに

『スペードの女王（Пиковая дама）』[1]は、1834 年 3 月 1 日、雑誌『読書文庫（Библиотека для чтения）』第 2 号（C. 109-140）に発表された。発表と同時に『スペードの女王』（1834 年）は、その印象的なストーリーによって人気を博した。プーシキンは、1834 年 4 月 7 日の日記に次のように書き留めている。

> 私の『スペードの女王』は大流行である――賭博者たちはトロイカ、セミョルカ、トゥーズの順で賭けている。宮廷では、老伯爵夫人と公爵夫人ナターリヤ・ペトローヴナとの間に類似点が見つけられた。怒ってはいないようだ。（T. 12. C. 324）

だが、発表当時、『スペードの女王』の真価を、『読書文庫』の編集者センコフスキイは認めていたが、一般に人気を呼び起こしたのはそのストーリーであり、文体論的な偉業ではなかった[2]。『スペードの女王』がプーシキンの代表作の 1 つと評価されるのは、後のことである。

従来、『スペードの女王』は、スタンダール（Stendhal 1783–1842 年）[3]の『赤と黒（Le Rouge et le Noir）』（1830 年）やバルザック（Honoré de Balzac 1799–1850 年）[4]の『あら皮（La Peau de chagrin）』（1831 年）、『赤い宿屋（L'Auberge rouge）』（1831 年）との関わりが指摘されてきた。スタンダール、バルザック、プーシキンが同時代人であること、「フランス小説のナポレオン的成り上がり者（スタンダールおよびバルザックの主人公たち）」[5]とバフチンが述べたように、スタンダール、バルザック作品は、19 世紀フランス文学において、ナポレオン主義を代表する作品であり、『スペードの女王』もナポレオン主義というコードを持つ作品であることが、ゲルシェンゾーン、グコーフスキイ、シジャコーフ、デブレツェニイ、ペトルーニナ等によって指摘されてきた。だが、スタンダールの『赤と黒』

1　本稿では、プーシキン作品の使用テクストは、*Пушкин А.С.* Полное собрание сочинений в 17-и томах. М.-Л.: Изд. АН СССР. 1937-1959. による。以下、巻数とページ数を本文中に記す。『スペードの女王』はすべて T. 8 であり、ページ数のみを記す。

2　P. Debreczeny, *The Other Pushkin: A Study of Alexander Pushkin's Prose Fiction* (Stanford, CA: Stanford University Press, 1983), p. 87.

3　本名はアンリ・ベール（Henri Beyle）。1783 年東南フランスのドーフィネ地方の中心地、グルノーブルで生まれた。スタンダール（Stendhal）は架空の地名をもとにしたペンネーム。

4　バルザックは、1799 年に市民階級の子としてトゥールに生まれた（生年はプーシキンと同じ）。パリで法律を学ぶが、20 歳で文学を志し、1831 年、『あら皮』によって名声をかち得た。

5　M・M・バフチン（伊東一郎訳）『小説の言葉』平凡社、2002 年、236 頁。

やバルザックの『あら皮』、『赤い宿屋』が『スペードの女王』と、どのような点において共通点や相違点を持っているのか。『スペードの女王』の独自性は何か、という点については十分には検討されてこなかった。

本稿は、『スペードの女王』とスタンダール、バルザック作品について、ナポレオンと賭博のモチーフを中心に、共通項とその役割、人物像の特徴づけに注目して検討し、『スペードの女王』の独自性を明らかにすることを目的とする。第1に、スタンダールの『赤と黒』と『スペードの女王』とを対比し、第2に、バルザックの『あら皮』、『赤い宿屋』と『スペードの女王』との対比を行い、第3に、対比の結果明らかとなった特徴が、どのような過程を経て『スペードの女王』に収斂したか、『スペードの女王』の断片と『スペードの女王』との対比を行う。

検討に先立ち、『スペードの女王』の執筆・発表状況について概括しておく。1833年8月末、プーシキンは『プガチョーフ叛乱史』を書くため、プガチョーフの乱（1773–74年）が起こったオレンブルグ、カザーン、シンビールスクを取材旅行し、帰途10月1日、プーシキン家の持ち村であるボルジノ村に到着した。コレラが発生し、プーシキンは村に引き止められることになった。10月から11月にかけての1か月半ほどのボルジノ村滞在中に、『スペードの女王』、『プガチョーフ叛乱史』、『アンジェロ』、『青銅の騎士』、民話詩、抒情詩が書かれた。この1か月半は「第二のボルジノの秋」といわれる。『スペードの女王』は、1834年1月31日と検閲を記され、同年3月1日、『読書文庫』に発表された。同年、少し修正をほどこして、『アレクサンドル・プーシキン小説集（Повести изданных Александром Пушкиным）』（C. 187-247）に収録された。原稿は残っていない。第1版があるのみである[(6)]。

1. スタンダール『赤と黒』と『スペードの女王』との対比

『赤と黒』は、1829年から30年にかけて創作され、1830年春に発表された。『赤と黒』は、ナポレオン失脚後の時代に、聖職につくことによって自らの運命を切り開こうとした青年ジュリヤン・ソレルの野心と挫折を描いている。ジュリヤンのナポレオン崇拝、階級制度への挑戦が、作品の主たる主題である。『赤と黒』については、発表当時、バルザックからは激賞されたが、一般的には認められなかった。テーヌやブールジェによって再発見され、正当に評価されるようになるのは、スタンダールの没後50年経ってからであった。

プーシキンと『赤と黒』との出会いは、ロシア軍総司令官クトゥーゾフの娘であるヒトロヴォー（E.M. Хитрово）夫人宛書簡がその根拠とされている。1831年5月後半（18日–25日）にペテルブルグからヒトロヴォー夫人へ宛てたプーシキン書簡には、「ご本をお返しいたします。奥様、『赤と黒』の下巻、ぜひお届け下さいますようお願い申し上げます。目下、夢中になっております。」（T. 14. C. 166. 原文フランス語）[(7)]とある。同年6月9日

6　*Гершензон М.О.* Мудрость Пушкина. Т-во «Книгоиздательство писателей в Москве», 1919. С. 105; *Сидяков Л.С.* Художественная проза А.С. Пушкина. Рига: ЛГУ им. Петра Стучки, 1973. С. 108.

7　栗原成郎・草鹿外吉・福岡星児・池田健太郎・川端香男里・木村彰一訳著『プーシキン全集6　回想・日記・書簡』河出書房新社、1989年、245頁。

（？）付とされるペテルブルグからのヒトロヴォー夫人宛プーシキン書簡では「『赤と黒』はよい小説です。まま不自然な美文調や悪趣味に出会いますが。」(T. 14. C. 172. 原文フランス語)[8]と述べられている。これらの書簡から、プーシキンが1831年に『赤と黒』を読み、「夢中にな」り、「よい小説」であると評価し、プーシキンの『赤と黒』への関心は好意的であったことが明らかである。

従来、『スペードの女王』は、『赤と黒』からの影響が指摘されてきた。指摘の要点は、『スペードの女王』のゲルマンと『赤と黒』のジュリヤン・ソレルにナポレオン主義という共通性があることであった。ゲルシェンゾーンは、ナポレオンのモスクワ遠征は、ゲルマンにとっては引き違えたトランプ札であると指摘した[9]。グコーフスキイは、ナポレオンはジュリヤン・ソレルの偶像であり、ナポレオンにとっての武器はゲルマンにとっての金であるとし、後にゲルマン像は、ドストエフスキイの『罪と罰』におけるラスコーリニコフの理論の基礎となったと指摘した[10]。シジャコーフは、ゲルマンとジュリヤン・ソレルは同系列に立ち、彼らの上昇志向はナポレオン的で、彼らの破滅もナポレオン的である、と述べている[11]。ヤクボーヴィチは、ゲルマンは悪魔的特徴を持つ主人公であり、貧しい几帳面な工兵士官の外見の内に、激しい、悪魔の、メフィストフェレスの、ナポレオンの心を持っている、としている[12]。デブレツェニイは、ジュリヤンは肯定的な人物であること、ナポレオンが象徴的にゲルマンの性格を特徴づけていることを述べた[13]。ダールスキイは、ナポレオンを、社会・人心に強い影響力を持つ人物であり、誘惑者である悪魔像として捉え、このようなナポレオンとの似通いをゲルマンに見ている[14]。

だが、これらのゲルマンとジュリヤンのナポレオン主義に基づく共通性の指摘は印象的な批評にとどまり、ゲルマンとジュリヤンの2人の人物像について、明確には示されてはこなかった。本節では、ゲルマン像とジュリヤン像の特徴づけを対比することによって、ゲルマン像と『スペードの女王』の独自性を明らかにすることを課題とする。

ゲルマンとジュリヤンの特徴づけには、共通項として、若い青年であることがあげられる。ジュリヤンは、「もうじき19」歳（28頁）[15]でレナール家の家庭教師となる時から23歳で処刑されるまでが描かれている。ゲルマンは「若い」（C. 227）とのみ書かれている。

彼らの身分にも共通項がみられる。ジュリヤンは「製材屋の倅」（13頁）という、「下層

8　同上、245頁。

9　*Гершензон.* Мудрость Пушкина. С. 102.

10　*Западов А.В.* В глубине строки. М.: Советский писатель, 1975. С. 65; *Гуковский Г.А.* Изучение литературного произведения в школе. М.-Л.: «Просвещение», 1966. С. 175-176.

11　*Сидяков.* Художественная проза А.С. Пушкина. С. 119-121. シジャコーフは、バルザックの『あら皮』に登場するラスチニャックも、ジュリヤンやゲルマンと同列に含めている。メイラッハは、プーシキンの詩において、目的のためには人間を道具とするナポレオンのイメージを指摘している（Там же. С. 121.）。

12　*Якубович Д.П.* Пушкин. 1833 год. О «Пиковой даме». Л.: Пушкинское общество, 1933. С. 57, 67.

13　Debreczeny, *The Other Pushkin*, pp. 191, 230.

14　*Дарский Д.С.* «Пиковая дама» // Пушкин. Исследования и материалы. Т. 15. СПб., 1995. С. 313.

15　スタンダール（冨永明夫訳）『赤と黒』（『世界文学全集15』）筑摩書房、1966年。使用テクストは以下同様。

階級」(461 頁) 出身であった。ゲルマンは「彼にわずかな資本を残し、ロシアに帰化したドイツ人の息子」(C. 235) であり、工兵士官 (C. 227)[16] であった。2 人は、生まれながらにして輝かしい将来が約束される身分の出身ではなかった。

外貌については、ジュリヤンは、「美貌」、「きゃしゃ」、「小柄」、「身軽さ」(18 頁) が描写され、ゲルマンは、「彼はナポレオンの横顔をして」(C. 244)、「彼はナポレオンの肖像に驚くほど似ていた」(C. 245) と、ナポレオンとの似通いが指摘されるだけで、必ずしも共通項は見受けられない。

2 人の性格には、いくつかの共通項が存在する。ジュリヤンの性格の特徴づけには、「野心」(20、44、61、62、249、484 頁)、「情熱」(44、45、108、109 頁)、軽蔑されたら我慢できない強い「自尊心」(201、266、325、423、426、434、463 頁)、「打算」(24、76、85、272、315 頁) が指摘できる。ゲルマンも、「野心」(C. 235)、「情熱」(C. 235)、「理性」(C. 227, 235)、「打算的」(C. 227) であると特徴づけられている。ゲルマンは賭博で金を得ることに執着しているが、一方でその執着を抑制し、「倹約、節制、勤勉。これが僕の 3 枚の確実なカードだ。これこそ僕の資本を 3 倍にも 7 倍にもし、僕に安楽と独立をもたらすのだ！」(C. 235) と、金銭に対して堅固な側面を持っている。ジュリヤンも、「このごろは、四十恰好で十万フランの給料をもらっている坊主がたくさんいる。つまり、ナポレオン麾下の高名な師団長たちの三倍だ。[…] ここは一番、坊主になるところだ」(24 頁) と、打算的であるが、金銭に対しては潔癖でもあった (151 頁、193 頁、261 頁、428 頁)。

2 人の性格の違いには、悪魔性の存在があげられる。ジュリヤンの性格には、「素直」(186 頁) で「優しい」(411 頁) 側面があり、悪魔性は全くない。一方、ゲルマンには、素直さ、優しさに関する描写は全くない。ゲルマンは、「その秘密は恐ろしい罪、永遠の幸福の破滅、悪魔の契約を伴うかもしれません。[…] 私はあなたの罪を私の心にお引き受けします。」(C. 241-242) と言い、「彼はナポレオンの横顔をして、メフィストフェレスの心を持っている」(C. 244) と描写されるように、悪魔との契約やナポレオンと共通する悪魔性が強調されている。

ゲルマンとジュリヤンの特徴づけの共通項として、明確な野心がある。野心の目的は、ジュリヤンは、立身出世を遂げ、身分を上昇させ、権力を得ることにあった。ゲルマンの具体的な目的は、「資本 (капитал)」(C. 235) を増やし、身分を上昇させることにあった。野心を達成するための手段として、ジュリヤンは「どんな立身も思いのままという」(20 頁) 聖職につくことを選び、製材屋の倅から、レナール家の家庭教師、神学校の学生、ラ・モール侯爵秘書、勲士ジュリヤン・ソレル・ド・ラヴェルネ、軽騎兵中尉へと、身分を上昇させていく。「彼の恋は依然として野心の変形」(85 頁) であり、恋すらも立身出世のための手段の 1 つであった。ゲルマンにとって、野心の達成の手段は、賭博によって大金を得ることであった。そのために必要な「3 枚のトランプ札」の秘密を知るためには、悪魔との契約、老婆殺し、リザヴェータへの裏切りをも辞さない。ジュリヤンとゲルマンには、無名の者がこれまで望み得なかった地位、権力、富を手に入れ、立身出世を果たそうとし、

16　М.П. Алексеев は、ゲルマンは、例外的な性格を持ち、その特異性からロシアの社会的環境においては異種であり、ドイツ出身、工兵、実務性という特徴を持つゲルマンという典型の発生に着目している (*Сидяков.* Художественная проза А.С. Пушкина. С. 119-120.)。

そのためには手段を選ばないというナポレオン志向があることが共通している。ジュリヤンは、ナポレオン時代を憧憬し（24 頁、56 頁、87 頁、168 頁、188 頁、262 頁、309 頁）、ナポレオンの肖像画を隠し持ち、『セント＝ヘレナ日記』とナポレオン軍の戦況報告書を愛読している。ゲルマンには、具体的なナポレオンへの傾倒は描かれずに、ゲルマン自身に「彼はナポレオンの横顔をして、メフィストフェレスの心を持っている」、「彼は腕を組み、眉をけわしくひそめて、窓枠に腰掛けていた。こうしていると彼はナポレオンの肖像に驚くほど似ていた」（C. 245）と、外貌の点からナポレオンのイメージとナポレオンの悪魔性が付与されている。

2 人の人物像の特徴づけ、さらには『スペードの女王』と『赤と黒』の大きな違いの 1 つは、愛のテーマの存在である。ジュリヤンには心から彼を愛してくれる優しいレナール夫人、一方的な愛とはいえ勇気ある侯爵令嬢マチルド、ナポレオン時代に軍医だった老人、老司祭シェラン師、神学校長ピラール師、ジュリヤンを救うため、けちといっていい程のつましさで貯めた全財産を売り払って看守を買収したいと考えている友人の材木商フーケがいる。ジュリヤンには敵対者がいたとはいえ、彼を愛してくれる多くの人々がいた。愛と友情は『赤と黒』全編を通して存在している。『スペードの女王』に愛と友情は存在しない。ゲルマンは誰も愛していない。彼にあるのはリザヴェータを裏切ったことへのかすかな良心の呵責だけである。「彼は打ち解けぬ性分であり野心家であった。そして同僚たちは 彼の過度な倹約をあざ笑う機会がなかなかなかった。」（C. 235）と、ゲルマンは打ち解けぬ性格であり、人づき合いがなかったことが明らかにされている。

『スペードの女王』と『赤と黒』の相違点の 2 つめに神の存在があげられる。ジュリヤンは聖職につきながらも「ラテン語の新約聖書を全部暗記したものだ、メーストル氏の『法王論』も覚えていたが、そのどちらもほとんど信用していなかった」（21 頁）。だが、自分が射殺しようとしたレナール夫人が生きていたことを知った瞬間、「ジュリヤンは神を信じていた、聖職者たちの偽善がなんだろう？そんなことで、神という観念の真実さ、崇高さが少しでも失われるだろうか？」（435 頁）と、神の存在を信じ始める。一方、ゲルマンは、「真の信仰はほとんど持たなかったものの、彼は迷信深かった」（C. 246）と、神の存在を信じていないまま、破滅に向かう。

『赤と黒』の結末は愛によって貫かれている。ジュリヤンは処刑前の最後の時を、レナール夫人に見守られて過ごした。結末では、「すべてのものが、新しい角度から見えてくるのだ。もうすでに野心はない。」（437 頁）、「彼の心の中で、野心はすでに死に、その灰の下から新たに別個の情熱が生まれ出ていた。彼はそれを、レナール夫人殺害をはかったことに対する後悔と呼んでいた」（450 頁）、「まさに断頭台に上がろうとしているこの瞬間ほど、ジュリヤンの頭が詩的であったことはかつてなかった。昔、ヴェルジーの森で知った無上に幸福な瞬間の思い出が、一時に、しかも強烈な印象をもって彼の脳裡によみがえるのだった。」（485 頁）と、ジュリヤンの再生が暗示されており、『赤と黒』の結末は必ずしも悲劇的とはいえない。『スペードの女王』ではゲルマンの破滅とともに、狂気のテーマが導入されている。ゲルマンは、狂気の内に、オブーホフ病院の中で不条理の生を生き続ける。『スペードの女王』の結末は虚無的である。

以上から、『赤と黒』と『スペードの女王』について、次の点が指摘できる。

『赤と黒』と『スペードの女王』においては、ナポレオン失脚後という時代と結びついて、下層階級出身の青年がナポレオン志向にもとづき野心を抱き、挫折するテーマが共通する。野心の成就のための手段を、ジュリヤンは聖職に、ゲルマンは賭博に求めた。賭博によって資本を 3 倍にも 7 倍にもしたいと考えているゲルマンは、一般的に遺産を示すнаследство 等を用いず、資本（капитал）という語を用いることによって、資本という考え方を提出するとともに、単なる賭博者ではなくなっている。立身出世と成功を求めるゲルマンとジュリヤンの手段は異なるが、2 人が目指したものは、本来ならば望み得ない地位、権力、富という同一のものであった。

プーシキンが『スペードの女王』のゲルマンを単なる賭博者としてではなく、ナポレオンを志向する野心的な青年として捉えた点において、『赤と黒』との関わりが認められる。なぜならば、第 3 節で検討するように、プーシキンが『赤と黒』を読む以前には、『スペードの女王』創作のための断片や『スペードの女王』執筆以前の散文作品の中に、ナポレオンに関する記述は 1 つもないからである。

一方で、『赤と黒』と『スペードの女王』におけるナポレオン的な要素の描写の方法は異なっている。ジュリヤンの野心やナポレオン志向は、具体的なナポレオン崇拝と結びついていたのに対し、『スペードの女王』では、ゲルマン自身にナポレオンのイメージが付与された。ナポレオンの、他人を道具と見なすエゴイズムは、ゲルマンにおいては、老婆殺し、リザヴェータへの裏切りを生むこととなった。そのため、『赤と黒』と『スペードの女王』は異なる結末を迎える。ジュリヤンは、最終的にはナポレオン志向から脱却し、愛によって再生する肯定的な人物として死を迎える。それに対して、ゲルマンは、破滅し、否定的な人物のまま、精神的な死によって不条理の生を生き続けることとなる。『赤と黒』と『スペードの女王』は、主人公のナポレオン志向のテーマにおいて共通性が見られるが、その捉え方には相違点があったといえる。ここに、ジュリヤン像とゲルマン像は、それぞれに独自の人物像として、普遍性を得て、確立することとなった、といえる。

2. バルザック『あら皮』『赤い宿屋』と『スペードの女王』との対比

バルザックの『あら皮』と『赤い宿屋』は、ともに 1831 年に発表され、後に『人間喜劇（La Comédie humaine）』という総題のもとにまとめられた。『人間喜劇』は、風俗研究、哲学的研究、分析的研究の 3 部門に分けられ、『あら皮』と『赤い宿屋』は哲学的研究に分類された。

(1) 『あら皮』と『スペードの女王』との対比

作者自身の言葉によると、『あら皮』は快楽と長命という両立しえない 2 つの欲望の相克を描いた寓話である。「あら皮」には呪文が書かれていて、望みがかなうたびに皮が縮む。皮が縮むにつれ、生命が縮んでゆく。主人公のラファエルは最後に「あら皮」にとり殺される。

『あら皮』と『スペードの女王』について、デブレツェニイは、『あら皮』のラファエルとゲルマンが賭博で大金を得ようとしていることに似通いがあること、『あら皮』に描かれ

た賭博が、『スペードの女王』のゲルマンとチェカリンスキイの賭博に霊感を与えたであろうこと、ラファエルが命が縮むことと引き換えに何でも望みがかなう「あら皮」を受け取る状況と、ゲルマンが良心と引き換えに「3 枚のトランプ札」の秘密を得ようと申し出る状況とに類似が見られること、また、老伯爵夫人と骨董屋の主人との類似を指摘している[17]。ペトルーニナは、『あら皮』と『スペードの女王』がプロップの魔法民話の構造と一致すると指摘する[18]。『あら皮』の神秘的な骨董屋の老人は民話の贈与者の代理であるとし、こまごまと聞き出した後で魔法の手段として「あら皮」を与え、ラファエルに耐え抜く試練を与える。「あら皮」は主人公のあらゆる障害を払いのけながら、情熱によって滅ぼされる人間の生の象徴となっている。『スペードの女王』では、老伯爵夫人は秘密を保持し、ゲルマンに奇跡的な知識を与える贈与者である。リザヴェータ・イワーノヴナは援助者として民話の王女の特徴と一致する。トムスキイの語るアネクドートも小さな魔法民話であるという。サン・ジェルマン伯という援助者は、老伯爵夫人に奇跡的な手段である「3 枚のトランプ札」を贈与する。『スペードの女王』における賭博は、おとぎ話の戦いの表現形式の１つであり、ゲルマンがトムスキイのアネクドートを聞いて「おとぎ話さ！」と言うのは偶然ではない、と指摘する。ゲルマンは民話におけるアンチヒーローの役であり、そのため、小説は民話の平穏無事の獲得で終わらずに、希望の崩壊とゲルマンの生の破綻によって終わる、とする。

デブレツェニイ、ペトルーニナの指摘は興味深い説であるが、いくつかの矛盾点が見受けられる。デブレツェニイの指摘する『あら皮』のラファエルと『スペードの女王』のゲルマンの賭博は、同じ性質のものであろうか。ペトルーニナによるとゲルマンは、「試練に耐えなかった」アンチヒーローとされる[19]。だが、『スペードの女王』において、どのような行動を取ろうともゲルマンは主人公である。魔法民話の原則に従うのならば、ゲルマンはヒーローの役割を担い、最終的には王女との結婚によって終わるはずである。さらに、ペトルーニナは「死者は自分の意思で現れたのではなく、ゲルマンの「願いをかなえてやれと命じられて」現れている。我々はここで、この「命じられた」という言い方の動機づけの内的な発展の分析にこだわってはいられない。（これはおとぎ話には、原則的には知られていない。[…]）老伯爵夫人が、新しい生活で従属している、この力による命令は何に根拠を置いているのであろうか」と述べている[20]。ペトルーニナ自身が魔法民話の構造では分析しきれない矛盾点を指摘しているのである。

本節では、『スペードの女王』と『あら皮』で行われる賭博を対比し、『スペードの女王』の賭博と『あら皮』の賭博が同じ性質のものか、『あら皮』の賭博が『スペードの女王』の賭博に霊感を与えたか、「あら皮」と「3 枚のトランプ札」の秘密を与えられる状況、贈与者の背後にある意思の存在について検討し、『スペードの女王』の特徴を明らかにする。

賭博は、『スペードの女王』と『あら皮』の共通項の１つである。だが、ゲルマンとラファエルでは、賭博に対する考え方が全く異なっているといえる[21]。ゲルマンにとって

---

17 Debreczeny, *The Other Pushkin*, pp. 208-209.
18 *Петрунина Н.Н.* Проза Пушкина. Л.: Изд. «Наука», 1987. С. 226-236.
19 Там же. С. 231.
20 Там же. С. 236.
21 森田敦子「『スペードの女王』論：賭博者としてのゲルマン」『日本プーシキン学会会報』第 27 号、1997 年 9 月。

賭博は、資本を3倍にも7倍にも増やす、身分上昇の手段である。ゲルマンは「倹約、節制、勤勉。これが僕の3枚の確実なトランプ札だ。これこそ僕の資本を3倍にも7倍にもし、僕に安楽と独立をもたらすのだ！」と、自分の人生の方針を述べている。理性的で堅固なゲルマンは、危険を伴う賭博においても確実な手段によらねばならず、そのため、賭博は確実に勝てるトランプ札を知った時にのみ、行うことのできるものであった。これに対し、ラファエルは、20歳の時の賭博体験を「ぼくの生涯でいちばん恐怖をともなった快楽、するどい爪で武装された快楽、徒刑囚の肩に灼きつけられた焼鉄のようにぼくらの心の底ふかくめりこんでゆく、そうした快楽である。」（63頁）[22]と述べ、賭博を「快楽」として、1つの芸術とさえみなしている。

2人の金に対する考え方も違っている。ゲルマンは、賭博によって資本をふやし、身分を上昇させようと求めており、金はそのための手段である。ナポレオンの時代に、軍人たちは勇敢さと業績によって、これまで望み得なかった地位、権力、富、名誉を手に入れることができた。しかし、ナポレオンの時代が終わった今、軍人としての成功への道はなくなった。帰化したドイツ人の息子であり、工兵士官のゲルマンにとって、輝かしい立身出世はもう望めなかった。大切に守ってきた4万7千ルーブリの遺産である「資本」を野心のためにいかに活用するかがゲルマンにとって最大の課題であった。ゲルマンは、「彼は打ち解けぬ性分であり野心家であった」と、「野心家」であると特徴づけられている。それに対し、ラファエルに「資本」という考え方はない。ラファエルにとって金は使うため、虚栄のためでさえある。ラファエルにはゲルマンのような明確な野心は描かれていない。

では、『あら皮』に描かれた賭博が『スペードの女王』のゲルマンとチェカリンスキイの賭博に霊感を与えたであろうか。プーシキンと賭博とのかかわりは古く、プーシキンは賭博・賭博者について散文作品を書こうとしており、1819年には『ナージニカ（Надинька）』と呼ばれる断片を創作していることが指摘されている[23]。また、賭博好きなプーシキンはさまざまな賭博を知っていた。1830年にプーシキンは、モスクワのプロの賭博師オゴーニ・ドガノフスキイに2万5千ルーブリ負けてこの借金に苦しんだ。プーシキンが賭博に最も近かったのは1828年から1830年であり、『スペードの女王』の最初の構想はこの頃に生まれたとされている[24]。よって、1831年に発表された『あら皮』における賭博の描写が、『スペードの女王』の賭博に直接的な影響を与えたとは考えられない。

ゲルマンとラファエルの共通項として、超自然的な力に頼ることがあげられる。ゲルマンにとっては「3枚のトランプ札」であり、ラファエルにとっては「あら皮」である。この秘密の手段を得るために、2人は悪魔との契約を結ぶ。ゲルマンは、老伯爵夫人に対し、「その秘密は恐ろしい罪、永遠の幸福の破滅、悪魔の契約を伴うかもしれません［…］私はあなたの罪を私の魂にお引き受けします。」と、悪魔との契約を申し出る。ラファエルも「宿命的な契約」（28頁）を結ぶ。

勝つことができる「3枚のトランプ札」の秘密を知っている老伯爵夫人と、超自然的な

22　バルザック（山内義雄・鈴木健郎訳）『あら皮』（『バルザック全集3』）東京創元社、1981年、63頁。使用テクストは以下同様。

23　*Гершензон.* Мудрость Пушкина. С. 108.

24　*Якубович.* Пушкин. 1933 год. С. 60.

能力を持つ「あら皮」の所有者である骨董屋の主人は、贈与者としての役割においては類似している。だが、骨董屋の主人が現実の世界の人物であるのに対して、老伯爵夫人はゲルマンが見る「幻」として現れている点が異なっている。さらに「あら皮」は、現実の世界に入り込む、超自然的な能力を持つ要素である。それに対し、「3 枚のトランプ札」「トロイカ（3)」「セミョルカ（7)」「トゥーズ（1)」は、現実世界に現れた超自然的な幻がゲルマンに与えたものとも考えられるが、一方で、ゲルマンは常に、「倹約、節制、勤勉。これが僕の 3 枚の確実なカードだ。これこそ僕の資本を 3 倍にも 7 倍にもし、僕に安楽と独立をもたらすのだ！」と自らに言い聞かせている。注意深く読むと、「僕の資本（1：筆者注）を 3 倍にも 7 倍にもし」の中に、3、7、1 の数字が潜んでいる。ここからは、ゲルマンが幻から与えられる 3 枚のトランプ札「トロイカ」「セミョルカ」「トゥーズ」は、ゲルマン自身によって既に心の中に準備され、ゲルマンの潜在心理と重なって、幻の言葉となって現れているとも解釈できる。つまり、「3 枚のトランプ札」の出現は現実的に解釈することも可能なのである。ここから、「あら皮」がラファエルに与えられる状況と「3 枚のトランプ札」がゲルマンに与えられる状況は、同じ状況として捉えられるわけではない、と指摘できる。

ペトルーニナが魔法民話の構造では分析しきれないとした、贈与者の背後にある意思の存在については、プーシキンが『スペードの女王』に『マクベス』の構造を使い、既存のイメージを付与し、全く新しい作品を創作した、という仮説[25]から解釈が可能である。この論旨において、『スペードの女王』の老伯爵夫人は『マクベス』の魔女の役割を果たしていると想定される。幻が「私は自分の意志に反して、おまえのところに来ました」(C. 247)、「私はおまえの望みをかなえてやれと命じられてやってきました」(C. 247）と、自分の意志ではないこと、命じられてやってきたことをはっきりと述べていることは、『マクベス』の魔女たちの背後に闇の女王ヘカテが存在しているように[26]、幻を支配している存在が背後にいることを示し、幻に魔女的な性格を与えていると考えられる。さらに、ゲルマン自身が「この老いぼれの魔女め！（Старая ведьма！）」と言っている。

『あら皮』と『スペードの女王』の共通項としては、ナポレオンのイメージがあげられる。『あら皮』では、迫り来る死におびえるラファエルの目について、「1815 年、エリゼの宮殿で、敵軍の戦略上の蹉跌を耳にして、24 時間の指揮権を要求しながら、ついに許されなかった失意のナポレオンの目ざしでもあった。勝者にして亡者の目ざし！さらに言えば、それは数ヶ月前に、ラファエルがセーヌの河面に見入った目、あるいは、賭けた最後の金貨（ナポレオン金貨）に投げたあの目でもあった。」(158 頁、下線は筆者による。）と、描かれている。『あら皮』では、ナポレオンのイメージがラファエルに移行されている。作品の中では他にも、ナポレオンやネー将軍（1769-1815 年）の名前がラファエルによって憧れをもって語られている。

『スペードの女王』では、ゲルマンについて、「彼はナポレオンの横顔をして、メフィストフェレスの心を持っているのさ、僕は彼の良心の中に少なくとも 3 つの悪があると思う

25　森田敦子「『スペードの女王』と『マクベス』」柳富子編『ロシア文化の森へ：比較文化の総合研究』ナダ出版センター、2001 年。

26　シェイクスピア（永川玲二訳）『マクベス』（『世界文学全集 4』）集英社、1979 年、483 頁。

ね。」と、トムスキイの視点から、ゲルマンのナポレオンとの似通い、メフィストフェレスの心、3つの悪によるゲルマンの悪魔性が描写される。さらに、リザヴェータの視点から、「こうしていると彼はナポレオンの肖像に驚くほど似ていた」と捉えられ、リザヴェータに感動さえも与えるほど、肯定的に捉えられている。

『スペードの女王』が『あら皮』から霊感を得たものがあるとすれば、それはナポレオンのイメージをゲルマンに移行したことである、と考える。『スペードの女王』ではゲルマンに、ナポレオンの外貌との似通い、「メフィストフェレスの心」を付与し、悪魔との契約、老婆殺し、リザヴェータへの裏切りという「3つの悪」によって、ナポレオンの悪魔性をゲルマンに付与している。ただし、『赤と黒』のジュリヤンや『あら皮』のラファエルがナポレオンについて、具体的に憧憬を持って語っているのに対し、『スペードの女王』ではゲルマンが自らナポレオンについて述べることはない。ゲルマン自身の行動はナポレオン的であるが、ゲルマンのナポレオン的要素は他者の視点から語られるのであり、ゲルマンにナポレオンのイメージを付与するにとどまり、作品に解釈の余地を残している。

『あら皮』と『スペードの女王』の他の共通項として、スウェーデンボルイ・錬金術・ガルヴァニズム・メスメルの磁気・鏡等について両作品の中で言及されていることがあげられる。バルザック自身、スウェーデンボルイの信奉者であった。鏡は、『スペードの女王』では、老伯爵夫人の化粧部屋とリザヴェータの部屋の粗末な小さな鏡、『あら皮』では、イギリス風の豪華なフェドラの部屋の描写に、鏡板の組み合わせによる壁板がある。両作品におけるこれらの共通項は、19世紀初頭に、人々の関心を集めた現象、物、人物であった。だが、両作品におけるこれらの現象、物、人物の役割は異なっている。『あら皮』では、ラファエルは誘惑に陥らぬようオペラグラスのレンズに仕掛けをして、女の美しい容貌をみにくく映すようにし、鏡やガラスの不思議な力に注目し、作品に対して積極的な働きをしている。それに対し、『スペードの女王』では、当時の風俗描写の1つとして、流行を取り入れたにとどまっている。

(2)『赤い宿屋』と『スペードの女王』との対比

『赤い宿屋』は、1831年8月、『パリ評論』に発表され、1832年10月、『新哲学短編集』に収録された。

20才位の、律義で善良な2人のフランス人青年、フレデリック・タイユフェールとプロスペール・マニャンは軍医補として任地に赴く途中、「赤いペンキで隅から隅まで塗り上げられた」赤い宿屋でドイツ人商人と同宿した。商人が大金を持っていることを知ると、フレデリックは商人を殺し、金を奪って逃走する。プロスペールは罪を着せられ、処刑される。処刑直前にプロスペールから事件の真相を聞いたヘルマンは彼の潔白を信じた。30年後、ヘルマンは晩餐会で主催者の娘から「ぞっとするようなお話を」と求められて、30年前の話を始める。

トマシェフスキイは、『スペードの女王』創作直前に、フランスで『赤い宿屋』が刊行されたこと、『赤い宿屋』の中に「小説本に現れるたいていのドイツ人と同じように、この男の名前をヘルマン（ドイツ語でゲルマン）といった」と書かれており、ヘルマンとゲルマンが無意識の内に一致することは困難であること、さらに両作品の主人公の手っ取り早く

金持ちになりたいという、金に対する考え方の一致を指摘し、プーシキンが『赤い宿屋』を知っていたはずである、としている[27]。

『赤い宿屋』と『スペードの女王』には、トマシェフスキイが指摘する以外にも、重要な共通項がみられる。本節では、『赤い宿屋』と『スペードの女王』の共通項について、それぞれの作品において、どのように描かれているか検討する。

両作品とも、ドイツ人についての説明があることが指摘できる。『赤い宿屋』[28]では、語り手のヘルマンや殺されるドイツ人商人について、「きちょうめんな質と見えて、きちんと食卓に向かい、ヨーロッパに鳴りひびいている例のドイツ流の食欲を発揮して」、「ドイツ精神というもの、その夢想や神秘主義のいかなるものかが合点される」、「骨身をおしまないこと、そして実直であること、これがすべてを征服します。だが、辛抱強いことが大切なのです」、「ドイツ流のゆきすぎ」、「正客のドイツ風の篤実な態度」(302 頁) 等の描写によって、ドイツ人の特徴を説明している。

『スペードの女王』では、「ゲルマンはドイツ人だ。彼は勘定高い。それだけのことさ！」(C. 227)、「ゲルマンは彼にわずかな資本を残し、ロシアに帰化したドイツ人の息子であった。独立を堅固にする必要性を確信しているゲルマンは利息には手を触れずに、給料だけで生活し、自分に少しの気まぐれも許さなかった」(C. 235) と描かれ、ドイツ人である特徴として、ゲルマンを打算的、理性的、堅固として特徴づけている。全財産である 4 万 7 千ルーブリを 3 倍にも 7 倍にもしたいと考えている一方で、賭博への情熱を抑制するゲルマンに説得性を持たせるためには、ゲルマンはドイツ人でなければならなかったのである。

次に、ナポレオンに関連する記述があることが指摘できる。『赤い宿屋』には、ナポレオンの将軍オージュロー (1757-1817 年) の名前、軍医補の辞令にはベルナドット (1763-1844 年) の名前がある。オージュローは下僕の息子であったが、勇敢さゆえに兵卒から将軍にまで昇りつめた。ベルナドットは下士官からスウェーデン・ノルウェー両国の王カール 14 世となった。ナポレオンの時代に、軍人たちは輝かしい立身出世を遂げることが可能であった。この立身出世を目の当たりにした野心的な若者たちは成功するための手段や方法を求めていた。『スペードの女王』では、ゲルマンにナポレオンの悪魔性を付与しつつ、ゲルマンのナポレオン志向を描いている。

『赤い宿屋』と『スペードの女王』では、間取りや状況の詳細な説明が共通している。『赤い宿屋』では、次のように描かれている。

> ところで、話がこまかくなってまいりましたからには、宿屋の間取りについても申し上げなくてはなりますまい。なぜと申して、この物語の興味は、場所を正確に心得ているかどうかにかかっているのですから。いま三人の人物がおります広間には、出口が二つございました。一つは、ライン河にそってアンデルナハへゆく道に面しています。そこの、宿屋のまえには、いうまでもなく小さな船つき場があって、くだんの商人が、旅行用に借りきった小舟がつないであ

27 *Томашевский Б.В.* Французская литература в письмах Пушкина к Е.М. Хитрово // Письма Пушкина к Е.М. Хитрово. Л., 1927. С. 246; Debreczeny, *The Other Pushkin*, p. 208; *Петрунина.* Проза Пушкина. С. 206.

28 バルザック（水野亮訳）『赤い宿屋』（『世界文学大系 23 バルザック』）筑摩書房、1960 年。使用テクストは以下同様。

ります。いま一つの口は、宿屋の中庭へ出られるようになっています。中庭は非常に高い塀がめぐらしてあり、うまやが人でいっぱいなので、そのときは一時、家畜と馬がつまっていました。大門は厳重に錠をおろしたあとだったので、亭主は商人と船頭たちを手早く入れるために、通りに面した広間の出口をあけたのでした。亭主は、プロスペール・マニャンの望むがままに窓をあけてから、この出口を締めにかかり、かんぬきの棒を穴に入れ、ねじをかけました。二人の軍医補が寝ることになった亭主の部屋は、広間のすぐとなりで、料理場とはかなり薄い壁で仕切られていました。たぶんその料理場で宿屋の夫婦は一晩すごすことになるのでしょう。下女も広間を出てゆきました。どこかそのへんのまぐさ桶か、屋根裏部屋の片隅か、またはゆきあたりばったりのところへねぐらをさがしにいったのでしょう。広間と亭主の部屋と料理場が、この宿屋の他の部分から、まずいってみれば隔離していたということは、たやすくわかります。(307 頁、下線は筆者による。)

このように『赤い宿屋』では、間取りの説明が詳細に語られる。小説の中でヘルマンが、「この物語の興味は、場所を正確に心得ているかどうかにかかっているのですから」と、言っているように、殺人が起こる場所や状況が前もって詳しく説明される。

『スペードの女王』においても、リザヴェータは手紙の中で邸の間取りや状況を詳しく説明し、再びゲルマンの視点からも描写される。リザヴェータの手紙は次のように書かれている。

伯爵夫人がお出掛けになってしまいますと、召使たちは、多分、立ち去るでしょう。玄関の間に守衛が居残るでしょうが普段は自分の小部屋に下がってしまいます。11 時半にいらして下さいませ。まっすぐに階段をお進み下さい。もしあなたが控えの間に誰かを見かけましたならば――その時はあなたは伯爵夫人は御在宅でしょうか、とお尋ね下さいませ。あなたは不在だと言われることでしょう。――別に問題になることは何もありません。あなたは戻らねばなりませんでしょう。でも恐らくあなたは誰にも出会わないでしょう。女中たちは皆自分たちの 1 つの部屋に居ります。控えの間から左へお進み下さい。そのまま、まっすぐに伯爵夫人の寝室までいらして下さい。寝室の衝立の陰に 2 つの小さな扉が見えるでしょう。右手のは伯爵夫人が決してお入りになったことのない書斎へ通じて居り、左手のは廊下に通じて居ります。そしてちょうどそこに狭いらせん階段があります。その階段は私の部屋に通じて居ります。(C. 239)

ゲルマンがリザヴェータの指示に従って邸の中を進んで行く時、今度は、ゲルマンの視点から、1 つ 1 つ確認されながら、繰り返される。

11 時半ちょうどに、ゲルマンは伯爵夫人の邸の表階段を進み、明るく照らされた玄関の間に入った。守衛はいなかった。ゲルマンは階段を駆け上がり、控えの間に通じる扉を開けると、いくつかの古風な汚れた肘掛け椅子でランプの下で眠っている召使を見た。ゲルマンは軽いしっかりした足取りで彼のそばを通り抜けた。広間と客間は暗かった。ランプがかすかにそれらを控えの間から照らしていた。ゲルマンは寝室に入った。[…] ゲルマンは衝立の陰に隠れ

た。衝立の陰には、小さな鉄の扉があった。右手には書斎に通じる扉があり、左手には廊下へ出る別の扉があった。ゲルマンは左手の扉を開けると、貧しい養女の部屋へ通じている狭いらせん階段を見た。・・・しかし彼は戻ると暗い書斎へと入った。(C. 239-240)

詳細な間取りの説明は『赤い宿屋』と『スペードの女王』にとって、小説に緊張感と、具体性を与えるために重要な描写となっている。

次に、E.T.A. ホフマンとの関わりが見受けられる。『スペードの女王』は、ホフマン風の作品と言われてきた。『赤い宿屋』では、晩餐会の主催者である銀行家の「てっきりホフマンの短編やウォルター・スコットの長編などを読んでいるにちがいない」(302 頁) 一人娘に求められて、ヘルマンは話し始める。バルザックは、時々、ホフマンを意識し、ホフマン風の描写を加えながら、タイユフェールの二面性を暴き出している。

『赤い宿屋』と『スペードの女王』には、罪・裏切り・罪の意識が描かれている。『赤い宿屋』では、フレデリック・タイユフェールは、殺人を犯し、友人プロスペールに罪を着せ、友人を裏切った。タイユフェールは一生、罪の意識に苦しむ。プロスペール・マニャンにとって、商人の持つ 10 万フランは、そっくり出来上がっている財産だった。プロスペールはこの 10 万フランで母親の夢である 30 アルパンの牧場を買い、ポーヴェーのある娘と結婚することを考える。空想を現実に変える方法として、プロスペールは 1 つの犯罪を頭の中で組み立てることに無我夢中になった。プロスペールは友人の犯した罪を着せられて銃殺される。プロスペールは、頭の中で殺人を想像し、神の前の罪を犯したと考える。『赤い宿屋』には、殺人・裏切り・神の前の罪・罪の意識が描かれている。

『スペードの女王』において、ゲルマンはリザヴェータに偽りの手紙を送り、邸に入る手段を整えさせた後に裏切る。「良心の呵責に似た何かが彼の心の中でこだました、そして再び静まり返った。」(C. 240) は、リザヴェータを裏切ったことへのゲルマンの罪の意識を示している。老伯爵夫人に対してゲルマンは「3 枚のトランプ札」を教えてくれるよう懇願し、「もしかしたらその秘密は恐ろしい罪、永遠の幸福の破滅、悪魔の契約を伴うかもしれません」、「私はあなたの罪をわたしの魂にお引き受けします」(C. 241-242) と悪魔との契約を申し出る。願いがかなえられぬことを知ると、ゲルマンは老伯爵夫人を脅し、死に至らす。ここに「老婆殺し」の罪が生じる。ゲルマンは「後悔を感じないものの、彼はたえず繰り返す、お前は老伯爵夫人殺しだ！という良心の声を完全に抑えることができな」(C. 246) くなる。ゲルマンのリザヴェータへの良心の呵責、罪の意識は、葬儀の夜現れた老伯爵夫人の幻の、リザヴェータと結婚するならば老伯爵夫人を殺した罪を許す、という言葉の中にも反映されている。これは、リザヴェータを裏切ったことへのゲルマンの罪の意識が、幻の言葉となったものと考えることもできる。なぜならば、老伯爵夫人がリザヴェータの将来について心配しているようには思えず、またそうした叙述は『スペードの女王』の中に一切ないからである。

『赤い宿屋』と『スペードの女王』は、2 つの時代から構成されている。『赤い宿屋』では、「共和時代第 7 年葡萄月の末ごろというと、いまの暦では、1799 年 10 月 20 日にあたる」(304 頁) とあることから、ヘルマンの話は 1799 年のことである。殺人を犯したタイユフェールが「もうかれこれ 30 年もその病気を身につけて」(319 頁) とあることから、現

在は1829年であることがわかる。

『スペードの女王』では、現在は1828年から1831年頃に設定されている[29]。老伯爵夫人が3枚のトランプ札の秘密を聞くパリで暮らしていた時期は60年前の1768年である。老伯爵夫人のモデルとされるゴリーツィナ夫人(1741-1837年)は1768年に27才であり、若い伯爵夫人は27才位に設定されていること、「それに彼女は87才だ」(C. 235)とも一致する。このように『赤い宿屋』と『スペードの女王』は、2つの時代を交互に描く構造をとっている。

以上、『あら皮』『赤い宿屋』と『スペードの女王』の共通項を取り上げてきた。その結果、次の点が指摘できる。

『赤い宿屋』については、ヘルマンとゲルマンの名前の一致というトマシェフスキイ説に加えて、ドイツ人の特徴づけ、ナポレオンに関する記述、詳しい間取りの説明の中で事件が展開されていること、E.T.A. ホフマンとのかかわり、罪・裏切り・罪の意識、2つの時代を交互に描き、手っ取り早く金持ちになりたい、そのためには殺人をも犯す、ナポレオン志向の青年を描いていることが両作品に共通している。『赤い宿屋』の青年は「金」を、『あら皮』のラファエルも「金」を、『スペードの女王』のゲルマンは「資本」をふやす手段を求めた。『スペードの女王』がナポレオン時代以後の青年の野心と挫折を描こうとしたことは、『赤い宿屋』と共通する主題である。『あら皮』では死を前にしたラファエルに、ナポレオンの眼差しのイメージが付与されている。プーシキンが『あら皮』から霊感を得たものがあるとしたら、それはナポレオンの外貌のイメージをゲルマンに付与したことであるといえる。

3.『スペードの女王』の断片と『スペードの女王』との対比

『スペードの女王』の源泉は、プーシキンの最初の散文の試みである『ナージニカ』(1819年)にまで遡る。1828年夏に、賭博仲間のゴリーツィン公爵から「3枚のトランプのアネクドート」を聞いたことをきっかけに『スペードの女王』の創作が具体化した。

プーシキンは、1819年の創作ノートにあった断片『ナージニカ』を『スペードの女王』に使用することにした。『スペードの女王』の原稿は残っていないが、ゲルシェンゾーンは『ナージニカ』と1832～1833年の創作ノートの中に発見された数々の断片の中に、『スペードの女王』創作の過程をたどることができるとしている[30]。

本節では、『スペードの女王』創作以前に、書かれた作品、未完の作品、断片から、賭博に関する記述のあるものを選び出し、その中に賭博がどのように現れているかを検討する。

①『ナージニカ』(1819年)(T. 8. C. 401)

ほとんどが軍務についている何人かの若者たちが、ポーランド人のヤースンスキイに賭博で負けて自分の領地をとられてしまった。ヤースンスキイという男は暇つぶしに、ちょっとした親

29　笠間啓治「『スペードの女王』の老伯爵夫人のモデルをめぐって」『ロシヤ語ロシヤ文学研究』第14号、1982年9月；笠間啓治「家系図の上から見た『スペードの女王』ゴリーツィナ公爵夫人(1)」『人文社会科学研究』第24号、1984年3月。

30　*Гершензон.* Мудрость Пушкина. С. 104.

をつとめていた。彼はカードを切った後、配りながら重々しい様子でカードをすり替えた。トゥーズ、トロイカ、ぼろぼろのキング、折れ曲がったジャックが扇のように散らばり、消されたチョークのもうもうとしたほこりがトルコたばこの煙とまざり合っていた。

「本当に夜中の2時かい？おやまあ何と長居したことだろう。もう勝負をやめる頃かな」ヴィークトルNは若い仲間に言った。皆がカードを投げて席を立った。それぞれがパイプを深々と吸いながら、自分のや他人の勝ちを計算しはじめた。言い争ったり、同意したりして散会した。

「一緒に夕食をしないかい？」軽薄なヴェリヴェーロフがヴィークトルに尋ねた。「僕は君にとても可愛い娘を紹介するよ。君は僕に感謝するだろうよ。」

二人はドロシキに乗り込み、静まりかえったペテルブルグの街を走りだした。

『ナージニカ』に登場する人物は、気晴らしのため、社交のために賭博をする青年貴族たちである。親をつとめているポーランド人のヤースンスキイはプロと思われる賭博師である。

② 端の破れた小さな断片（1819年）（T. 8. C. 429）

「トランプ札；売られた…карты；продан…」と書かれたこの断片には1819年11月と記されている。

③ 『スペードの女王』第1章へのエピグラフ（1828年）（T. 8. C. 834）

お天気の悪い日には／彼らはよく集まった。／五十から／百へと、／倍賭けしたり／――神よ彼らを許したまえ！――／勝って、／チョークで／書き記した。／このように、お天気の悪い日には、／トランプ賭博をした。

このエピグラフは、プーシキンがセルゲイ・ゴリーツィン公爵のところで、賭博をしていた時、緑色の賭博テーブルの上にチョークで書いた、と伝えられている。プーシキンは同年9月1日付ヴャーゼムスキイ公爵宛書簡の中で、この詩を発表し、私のペテルブルグでの生活はこのようである、とつけ加えている。1828年頃の賭博者プーシキンの生活がここにあらわれている。

④ 「断片1」（T. 8. C. 834）

4年程前に、ペテルブルグで互いの間に、様々な事情で関係のある、我々数人の若者が集まった。我々はかなりいいかげんに暮らしていた。食欲もないのにアンドリエで食事をしたり、楽しくもないのに酒を飲んだりしていた。ソフィア・オスターフィエヴナのところへ偽りの気まぐれで、哀れな老婆を怒らせに行ったりした。昼間のうちは、なんとなく暇をつぶし、晩になると順番に互いのところに集まった。

ここに「4年程前に」、ヴァリアントとして「2年前」「5年前」「3年前」がある。ここから、小説の場面が1828年～1831年に設定されていることがわかる。この断片の中に現

れている賭博者は独身時代のプーシキンの賭博仲間であるオレーニン、キセリョーフ、ゴリーツィン公爵等を思わせる青年貴族たちである。彼らは気晴らし、社交として賭博をしている。

⑤「断片 4」ゲルマンの賭博の計算。（T. 8. C. 836）

```
          47
          47
          94   1
          94
         188   2
         188
         376
         [67]
         [67]
   [268] [134]
   [268] [134]
   [536]
```

「断片 4」には、賭博の計算がある。資本金は 47（4 万 7 千ルーブリ）と 67（6 万 7 千ルーブリ）の計算がなされている。頁の下端には、資本金 40（4 万ルーブリ）案と 60（6 万ルーブリ）案の賭博の計算が線で消されている。プーシキンが資本金について思考を重ねていたことがわかる。

⑥『客は＊＊＊家の別荘に（Гость съезжались на дачу）**』（Ⅰ、Ⅱ章は 1828 年 8 月～ 9 月、Ⅲ章は 1830 年創作。未完。現在の形で発表されたのは執筆から 100 年後の 1930 年。）**

この中に「ホイストの場が定まった」（T. 8. C. 37）という語句がある。これは、社交界におけるトランプ賭博である。

⑦『書簡体のロマン（Роман в письмах）**』（1829 年）**

「お父さんは冗談好きで客好きな人、お母さんは太った、陽気な人でホイストが大好きな人」（T. 8. C. 47）

「彼は 3 人の老婦人たちといっしょにボストンの席につきました（その中にわたしのお祖母さんもいました）」（T. 8. C. 51）

「老婦人たちとコペイカ賭けでボストンをし、負けると腹を立てる。」（T. 8. C. 55）

これらのトランプ賭博は田舎での気晴らし、社交として描かれている。

⑧『その一発（Выстрел）**』（1830 年）**

主人公のシルヴィオのところで賭博が行われ、1 人の士官が「ついうっかりして余計な

角を折ってしまった」（T. 8. C. 66）ことから、喧嘩が始まる。『その一発』に描かれている賭博は気晴らし、社交としての賭博である。

⑨ 『エヴゲーニイ・オネーギン（Евгений　Онегин）』（1823 年～ 1831 年）（T. 6）

「先祖からの確かな財産を狡猾なトランプの 2 にまかせなかった人は幸いである。」（第 2 章 17 連）

「彼女は心も知恵もずっと気に入っていた、別の青年にこがれていた。このグランディソンは好感のもてるしゃれ者で、賭博者で、近衛の軍曹だった。」（第 2 章 30 連）

「ザレーツキイは、昔は乱暴者で、賭博仲間の親分で」（第 6 章 4 連）

「日曜日には、よく私と、ここの窓際で、眼鏡をおかけになって、トランプ遊びをなさいましたっけ。」（第 7 章 18 連）

『エヴゲーニイ・オネーギン』に描かれている賭博は、社交としての賭博、賭博狂である。

⑩ 『カフカースの鉱泉でのロマン（Роман на кавказких водах）』（1831 年）（T. 8. C. 412, 413）

『カフカースの鉱泉でのロマン』の概略を書いた紙に賭博の計算メモがあった。ここに賭博のテーマがあるが、登場人物の性格づけと賭博との関連は示されていない。

⑪ 『ドゥブロフスキイ（Дубровский）』（1832 年 12 月 21 日～ 1833 年 2 月 6 日）

「金遣いが荒く、功名心に燃えた彼は、浪費的なわがままを自分に許し、将来のことは心配もせずにトランプ賭博をしたり、借金をした」（T. 8. C. 172）

プーシキンはさらに『ドゥブロフスキイ』を書き続けるつもりでいたと思われ、残された草案の中に「賭博者たち（Игроки）」という語が見受けられる。

以上、示した断片と作品から明らかになることは、第 1 に、気晴らし、社交としての賭博とゲルマンの賭博との差異である。『ナージニカ』の青年貴族たち、『スペードの女王』の断片のオレーニン、キセリョーフ、ゴリーツィン公爵等を思わせる青年貴族たち、『スペードの女王』第 1 章へのエピグラフのプーシキンと賭博仲間たち、『客は＊＊＊家の別荘に』の貴族たち、『その一発』のシルヴィオや士官たち、『書簡体のロマン』の貴族たち、『エヴゲーニイ・オネーギン』のオネーギンやタチヤーナの母の昔の恋人、『ドゥブロフスキイ』のドゥブロフスキイ、これらの人物の賭博は単に気晴らしであり、社交としての賭博である。ゲルマンの賭博との違いは賭博、金に対する考え方の違いであり、賭博への取り組み方が違っている。

第 2 は、金儲けのための賭博はほとんどない。『ナージニカ』のプロの賭博師ヤースンキイがこれにあたるが、『スペードの女王』のような取り上げ方はなされていない。

第 3 は、賭博狂である。『エヴゲーニイ・オネーギン』で、レンスキイの決闘状を届ける

ザレーツキイは賭博仲間の親分であるが、賭博は主題とは関わっていない。

以上から、プーシキンが『スペードの女王』以前に書いた賭博は気晴らし、社交としての賭博であり、賭博者は、賭博好き、賭博狂であった。これに対し、『スペードの女王』のゲルマンは資本を3倍にも7倍にもし、独立と安楽を獲得するための手段として賭博をする全く違うタイプの賭博者であった。

第4に、プーシキンが『赤と黒』を読んだのは1831年5月～6月であるが、1831年以前に書かれた散文作品や断片には、ナポレオンに関する記述は1つもない。プーシキンがゲルマンを単なる賭博者ではなく、ゲルマンにナポレオンのイメージを付与し、ナポレオン失脚後の青年の野心と挫折を描いた点において、『赤と黒』、『あら皮』、『赤い宿屋』との関わりが認められるのである。

おわりに

本稿は、『スペードの女王』とスタンダール『赤と黒』、バルザック『あら皮』、『赤い宿屋』について、ナポレオン、賭博のモチーフを中心に、共通項とその役割、人物像の特徴づけに注目して検討した。その結果、以下の点が指摘できる。

『スペードの女王』は、『赤と黒』に描かれたと同様の、ナポレオン失脚後という時代に、下層階級出身の青年がナポレオン志向にもとづき野心を抱き、挫折するテーマを主題とした。プーシキンが『スペードの女王』の中で、ゲルマンを単なる賭博者としてではなく、野心的な青年として捉え、ゲルマンにナポレオンのイメージを付与した点について、プーシキンが『赤と黒』を読む以前には、『スペードの女王』創作のための断片、散文作品の中にナポレオンに関する記述は1つもないことから、『赤と黒』との関わりが認められる。

だが、ジュリヤン・ソレルの野心・ナポレオン志向は、ナポレオンの肖像画を隠し持ち、『セント＝ヘレナ日記』、戦況報告書を愛読するという具体的なナポレオン崇拝と結びついていたのに対し、『スペードの女王』においては、ゲルマン自身がナポレオンについて述べることはない。『スペードの女王』では、トムスキイやリザヴェータという他者の視点から、ゲルマンにナポレオンの外貌との似通いを指摘することによって、ナポレオン志向とナポレオンの負のイメージである悪魔性をゲルマンに付与している。こうした人物像へのイメージの付与は、『赤と黒』や『赤い宿屋』では用いられていない。『あら皮』において主人公に描写されたナポレオンのイメージの付与の方法に霊感を得たものとも思われる。

ナポレオンの他人を道具と見なすエゴイズムは、ゲルマンにおいては、老婆殺し、リザヴェータへの裏切りとなった。そのため、『赤と黒』と『スペードの女王』は異なる結末を迎える。ジュリヤンは、最終的にはナポレオン志向から脱却し、愛によって再生することが暗示され、肯定的な人物として死を迎える。それに対して、ゲルマンは、破滅し、否定的な人物のまま、精神的な死によって不条理の生を生き続けることとなる。『赤と黒』と『スペードの女王』の共通性は、主人公のナポレオン志向のテーマにあるが、その捉え方は異なっているといえる。そのため、ジュリヤン像とゲルマン像は、それぞれに独自の人物像として、普遍性を得て、典型となった。

『あら皮』においては、賭博が描写され、『スペードの女王』への関わりが指摘されてき

た。だが、プーシキンは、『あら皮』が発表される以前から、賭博をテーマに作品を書こうと意図しており、断片や散文が残されていることからも、『あら皮』の賭博が『スペードの女王』へ霊感を与えたとはいえない。

以上から、スタンダール『赤と黒』におけるナポレオン志向、バルザック『あら皮』における主人公の外貌にナポレオンのイメージを付与すること、『赤い宿屋』における、手っ取り早く金を得たいというナポレオン志向の青年の考え方が、『スペードの女王』と共通するものである。だが、『スペードの女王』において、これらのモチーフは、ゲルマン自身によって具体的には提出されず、他者の視点によって提出される。同一のモチーフを使ってはいても、モチーフの果たしている役割は異なり、提出の方法も異なっているといえる。これこそが、『スペードの女王』の独自性であるといえる。